

山口県立山口博物館と山口大学埋蔵文化財資料館の
連携協力協定事業について

荒 卷 直 大 ・ 横 山 成 己

**Collaboration cooperation agreement project between
Yamaguchi Prefectural Yamaguchi Museum and Yamaguchi University Archaeological Museum**

Naohiro ARAMAKI Shigeki YOKOYAMA

山口県立山口博物館研究報告

第45号(2019年3月)別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.45(March 2019)

山口県立山口博物館と山口大学埋蔵文化財資料館の 連携協力協定事業について

荒巻 直大¹⁾・横山 成己²⁾

Collaboration cooperation agreement project between Yamaguchi Prefectural Yamaguchi Museum and Yamaguchi University Archaeological Museum

Naohiro ARAMAKI Shigeki YOKOYAMA

Abstract

Yamaguchi Prefectural Yamaguchi Museum concluded a cooperation agreement with Yamaguchi university Archaeological Museum. We report the summary of the agreement and report cooperation business, effect, the future prospects, a problem.

1 はじめに

近年、博物館と大学を地域における重要な知的拠点と位置づけ、相互に人的・知的資源を相互に活用し、地域の活性化に向けて積極的に活用していこうという連携協力活動の取り組みは、各大学と各博物館との間で活発に行われるようになってきている。これらの活動は教育基本法等の改正や関連法律の整備に伴い両者の間で連携協力協定締結へ発展する動きもみられた。

山口県と山口大学においては、相互の資源を活用するとともに、様々な分野で協力することで地域の発展に寄与することを目的として、2015（平成27）年2月27日に包括的連携・協力に関する協定が締結されたものの、具体的な事業を展開するためにはその根拠となる個別的な連携協力協定が必要と感じられたことから、山口県立山口博物館（以下、山口博物館とい



両館連携協力協定調印式の様子

1) 山口県立山口博物館（考古）

2) 山口大学埋蔵文化財資料館（助教）

う。)と山口大学埋蔵文化財資料館(以下、埋蔵文化財資料館という。)は、同年6月24日連携協力協定を締結した。(以下、今協定という。)

本稿では、山口博物館と埋蔵文化財資料館(以下、両館という。)の今協定締結に至った経緯を振り返り、協定の概要を示すとともに、その具体的な事業、その成果・効果、更には課題と展望等について報告したい。

2 協定までの経緯

山口博物館と埋蔵文化財資料館が今協定締結に至るまでの経緯について詳述する前に、両館の沿革、設置経緯の概略についてふれておきたい。

山口博物館は1912(明治45)年に「防長教育博物館」として発足し、1917(大正6)年には山口県立教育博物館として県に移管され、戦後の改編を経て、自然・人文両部門をもつ総合博物館として1967(昭和42)年に改築され、現在に至っている。多分野にわたり36万点を超える学術資料を収蔵し、保管・展示、調査研究、教育普及、博物館学校地域連携教育支援事業など多様な博物館活動を行っている。

山口大学では、山口市吉田地区へのキャンパス統合移転工事中に多量の埋蔵文化財が出土したことを契機として、1967年(昭和42)に「山口大学吉田遺跡調査団」を結成し、1973(昭和48)年の統合移転終了まで構内発掘調査を実施した。その後、出土資料を収蔵することや、以降の施設拡充に伴う埋蔵文化財保護業務を実施することを目的として、1978年(昭和53)に埋蔵文化財資料館が設置された。同館は同大学構内遺跡の調査を行い、その成果を資料展示として公開するとともに、館設立前に山口大学教員や学生が発掘調査や採取により収集した県内の主要遺跡資料も継承しており、資料の学術公開を促進することによって地域貢献や関連機関・団体との交流を図ることに取り組んでいる。

以上のように両館はその設置者・設立の経緯は異なるものの、いずれも山口市内に位置し、立地的に近く、従来から博物館の教育普及活動等への大学教員派遣や所蔵品の展示貸出等の交流があった。

これらの経緯を踏まえて、両館の地域性、歴史的・文化的資源の活用、人的資源・物的資源の協同性の観点から「所蔵する学術資料を学生・研究者及び地域の住民の教育・研究及び学習活動に資するため、相互連携協力を一層充実させることを目的した」今協定を締結した。以下に「今協定」第2条の連携協力事項の条項を列記する。

- (1) 各館の歴史的・文化的資源の活用に関する事項
- (2) 各館の知的・人的資源の交流に関する事項
- (3) 他大学及び関連団体との連携協力に関する事項
- (4) その他各館が有益にして必要と認める事項

なお、協定期間については「協定締結日から5年間とし、協定の有効期間満了の3ヶ月前までに、各館のいずれかからも書面をもって改廃の申し入れがないときは、さらに5年間更新するものとし、その後の更新も同様とする。」とした。第2条の事項の実施に要する経費は、「原則として各館において各々応分に負担する。」とした。

また、今協定に基づいて、具体的な推進事業に係る事項について、以下の2点を目標として

覚書を取り交わした。

- (1) 連携企画展『半世紀の遺跡調査から読み解く 先史・古代の平川』の開催
 - (2) 山口県立山口博物館教育普及行事「山口市平川地区の遺跡探訪」の開催
- これらの具体的な事業報告については次章で詳述する。

3 事業報告

(1) 連携企画展『半世紀の遺跡調査から読み解く 先史・古代の平川』(2015年度)

両館による連携協力協定締結後の初の事業は、埋蔵文化財資料館展示室を会場とした連携企画展の開催である。当展示で対象とした山口市平川地区は、昭和40年代以降山口大学を始め高等学校等が複数設立され、現在では「文教地区」と呼称されるようになり、宅地開発も急激に進行し、旧来の景観は大きく変容している。一方で、当地区は長らく田畑が広がる農村地区であったため、地下に眠る遺跡は大きな破壊から免れ、現在でも良好にその姿を留めていることが特徴であり、山口市内において埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布する地域であることから、平川地区の考古学的考察・評価が地域史を復元する上で重要な役割を果たしていると考えられる。

展示では、平川地区において発掘された埋蔵文化財の中から、地域史を語る上で欠かせない重要な資料を厳選し、山口市教育委員会および山口市歴史民俗資料館の協力のもと、吉田遺跡、日吉神社横穴墓群、神郷大塚遺跡、西遺跡、小路遺跡などの実物資料を展示することによって、文字によって語られることのない平川の歴史的歩みの可視化を試みた。

2015(平成27)年7月27日から10月17日までの展示期間中、740名の方々に観覧いただいた。また会期中の関連事業として、9月5日(土)13時30分より平川コミュニティ推進会主催の平川地区のふれあい講座「考古資料に見る平川の歴史」を山口大学総合図書館アカデミックフォレストにて開催した。参加者人数は7名であった。



展示の様子(埋蔵文化財資料館)



平川地区のふれあい講座による展示見学

(2) 「山口市平川地区の遺跡探訪」(2015年度)

上記の企画展に関連して、平川地区の遺跡地にて各時代の集落や墳墓の立地、集落間の距離などを歩きながら体感することを目的とした講座「山口市平川地区の遺跡探訪」を、2015(平

成27)年10月10日(土)の13時～16時 に開催した。

コースは①山口大学内大賀ハス池公園(山口市仁保源久寺より株分けされた古代ハス)、②日吉神社横穴墓群(古墳時代終末期)、③山口大学就職支援施設「O-HARA」敷地(吉田遺跡室町時代集落)、④山口大学遺跡保存地区(吉田遺跡各時代遺構密集地区)、⑤埋蔵文化財資料館にて連携企画展の見学・資料解説、⑥山口大学遺跡保存公園(吉田遺跡弥生時代～古墳時代集落)、⑦神郷大塚遺跡(弥生時代から古墳時代終末期にかけての集落)、⑧小路遺跡(古墳時代中期の集落)、⑨広沢寺古墳(古墳時代後期)の全長約3.5kmと定め、探訪後、現地で解散することとした。

当日の参加者は、小学生から70代までの9名と少数であったが、天候にも恵まれ、道中参加者から様々な意見や感想が飛び交うなど活気にあふれた講座となった。コースに古墳など視覚的に理解できる遺跡が少なく、想像に頼らざるをえない遺跡探訪であることが危惧されたが、途中に出土資料を熟覧したことで、遺跡への理解がより深まったように感じられた。

参加者からは、「ちょうど良い距離の探訪だと思った。また地区を変えて、このような遺跡探訪を希望する」「平川地区の様子を知ることが出来て、また知りたいと思った」などの声が寄せられる一方、「1回につき1～2遺跡ずつを何回かに分けて定期的にあると良い」などの要望も寄せられた。



吉田遺跡見学風景(山口市吉田)



広沢寺古墳見学風景(山口市黒川)

(3) 「遺跡ウォークラリー」於：田布施町(2016年度)

2016年度以降の連携事業は、前年度に実施した講座「山口市平川地区の遺跡探訪」の成果を受けて、遺跡めぐり講座を継続的に実施することとなった。当該年度事業を計画する過程で、講座の理念や実施方法を検討し、次のように定めた。1. 国立大学施設と県立施設の連携事業であることから、県内広範囲で事業を実施すること。2. 遺跡めぐりの対象地は、所轄自治体の埋蔵文化財担当者が少ない地域、換言すれば住民が埋蔵文化財にふれあう機会が少ない地域を優先的に選定すること。3. コース中に遺跡出土品の熟覧、解説の機会を設けること。4. 所轄自治体に共催・後援を依頼し、できる限りの協力を得ること。以上の取り決めのもと、2016年度の開催地は山口県東部の田布施町に決定し、2016(平成28)年10月8日(土)の13時より開催することとなった。

コースは、①田布施町郷土館にて出土品の熟覧・解説の後、②国森古墳(山口県最古の古墳)、③石走山古墳群(古墳時代を通じての墓域)、④後井古墳群(山口県最大規模の横穴式

石室)、⑤^{いなりやま}稲荷山古墳(所属時期不明の異質な小石室墳)、⑥^{みくろうど}御蔵戸きつねびら古墳(全長5mを越える玄室を有する横穴式石室墳)、⑦田布施町郷土館帰着とし、距離のある①-②と⑥-⑦間を田布施町教育委員会の共催をいただき、公用車で移動することで歩行距離を約3kmに短縮し、16時頃解散することとした。

当日の参加者は、小学生から70代の16名であったが、強い低気圧が急接近する予報であったため、資料熟覧や現地での解説を大幅に短縮せざるを得なかった。最終目的地である御蔵戸きつねびら古墳に到着した14時40分には雨が降り始めたものの、全員無事に歩ききり、田布施町郷土館にて解散することができた。

慌ただしい講座となってしまったが、参加者からは「郷土の遺跡をくわしく知りました。出来るならもっとゆっくり!」「いろいろ説明を聞きながら、日頃行けない古墳を見ることができて興味深かったです。」という感想や、開催地の要望の声などが寄せられた。



田布施町郷土館での資料解説



国森古墳への道中(田布施町川西)

(4) 「古代ウォーク」於：萩市^{おおい}大井(2017年度)

2017年度には、市民により講座を身近に感じていただくため、講座名を「古代ウォーク」に変更した。開催地に関しては、2016年度に周防国造の奥津城と目される後井古墳の見学を行ったことを契機として、阿武国造^{あむこくぞう}の本貫地と見なされる萩市大井を選定し、萩市教育委員会の後援のもと、2017(平成29)年10月14日(土)13時より開催することとなった。

コースは、①萩博物館にて資料の熟覧・解説、②萩市大井公民館集合・出発、③^{てんちょうやま}天長山古墳(大井最古の古墳)、④^{えんこうじ}円光寺古墳(6世紀中ごろの首長墓)、⑤^{あなかんのん}円光寺穴観音古墳(6世紀後半～7世紀初頭の北浦最大規模の横穴式石室墳=阿武国造墓か)、⑥^{はにわがま}円光寺埴輪窯跡(山口県唯一の埴輪窯)、⑦大井大寺廃寺(阿武国造の系譜に連なる豪族の氏寺)、⑧大応寺駐車場(大井^{おおでらはいじ}大寺廃寺の塔芯礎・礎石4個)、⑨大井公民館帰着の約5.5kmで設定した。準備段階で問題となったのが、萩博物館から大井公民館までの移動である。計画当初は鉄道・バス等公共交通機関の使用を考えたが、遺跡の見学時間に無理が生じることから、最終的に参加者自身が自家用車により移動することとなった。

定員15名で参加者の募集を行ったところ、開催地である大井からの申し込みが多数あったため、21名での開催となった。講座の冒頭で行った資料の熟覧では、萩博物館の協力により講座室にて円光寺古墳出土品(山口県指定文化財)と円光寺埴輪窯跡採取品、大井大寺廃寺の採取品を解説したが、日頃博物館で展示されることのない資料群であることから、参加者の関心

は極めて高かった。現地での遺跡見学では、地元参加者から様々な地域情報をうかがいながら各遺跡の解説を行い、有意義な学習時間を設けることができた。また、事前に地元の方々が円光寺古墳周囲の草刈りを行ってくださったことも望外の幸せであった。一方で、発見当初は地域の関心を集めた文化財も、時間の流れとともに徐々に関心が薄れたようで、その結果が現地での案内看板や説明看板の少なさに表われているように感じられた。この現状を参加者と共有できたことも成果の一つと言える。

大井公民館到着直前に小雨が降り出し、急ぎ足でゴールを迎えることとなったものの、参加者からは「大井に住んでいて知らない事ばかりでした。ありがとうございます。」「折角の遺跡等を平易な本にまとめて欲しい。」などの声が寄せられた。



萩博物館での資料解説



大井大寺廃寺塔芯礎の見学(萩市大井)

(5) 「古代ウォーク」於：^{ながと}長門市深川^{ふかわ} (2018年度)

2017年度に阿武国造本貫地と目される萩市大井にて講座を実施した。考古学的な検討より阿武国の勢力範囲は6世紀後半に阿武・大津^{おおつ}に二分されたと推定されていることから、平成30年度は長門市深川を対象地に選定し、長門市教育委員会の共催のもと、2018（平成30）年10月13日（土）13時より講座を開催することとなった。

コースは、①ながと歴史民俗資料室にて資料の熟覧・解説、②^{すくもづか}椽塚横穴墓群（6世紀後半から7世紀にかけての山口県最大の横穴墓群跡地）、③^{おぼまやま}小浜山横穴墓群（一墓道に二つの玄室を有する7世紀の横穴墓）、④^{かみふんじゅう}上藤中横穴墓群（山口県内最古の火葬墓墳）、⑤長門深川廃寺（大津郡唯一の白鳳期創建寺院）と定め、①-②、③-④、④-⑤の移動の一部は参加者が自家用車で移動することにした。歩行距離は約4.5kmである。

当該年度も定員15名で参加者の募集を行ったところ、定員を上回る19人の申し込みがあった。また当講座に合わせ、ながと歴史民俗資料室にて企画展示『発掘された長門〜ご近所の古代史』が10月1日（月）から31日（水）までの会期で開催されていたこともあり、資料熟覧・解説のみ参加したいとの申し出もあった。

熟覧会場では、一部が山口県指定文化財となっている椽塚横穴墓群出土品や火葬骨壺として使用された上藤中横穴墓群出土須恵器のほか、当日見学しない遺跡資料も展示されていたため、予定を変更し様々な遺跡に言及しつつ資料を対比し、解説を行った。現地の見学では遺跡の概要を解説するとともに、これまでとやや趣向を変え、山口県随一の横穴墓群であり、学会の注目を集めつつも大正年間から昭和にかけて完全消滅した椽塚横穴墓群、化学的処理による保存

や埋め戻し保存を図った小浜山横穴墓群、発掘調査後に現状保存された上藤中横穴墓群などを対象に、参加者が「遺跡の保存」に対し意識が向上するよう努めた。最終目的地である長門深川廃寺跡では、一塔一金堂式であった在りし日の古代寺院の姿を想像し、^{いたもち}板持台地に広がる水田の下に眠るであろう巨大複合遺跡に思いを馳せつつ、全行程を無事終了した。

参加者からは「地元ですが、知らぬことばかりで大変勉強になりました。今回の資料をもとに以後、ゆっくり勉強していきます。」「深川廃寺は前から聞きたかったの、今日は本当にありがたかった。」などの声が寄せられる一方で、「車のウォークではなく、全部歩くウォーキングがいいと思う。」など鋭い指摘も寄せられた。歩行距離と参加者の主年齢との兼ね合いは、毎年度の課題となっている。近年は4～5kmを目安に設定しているが、遺跡間の距離や歩行による地形の体感は遺跡を理解する上で重要な視点であり、検討が必要であろう。



ながと歴史民俗資料室での資料解説



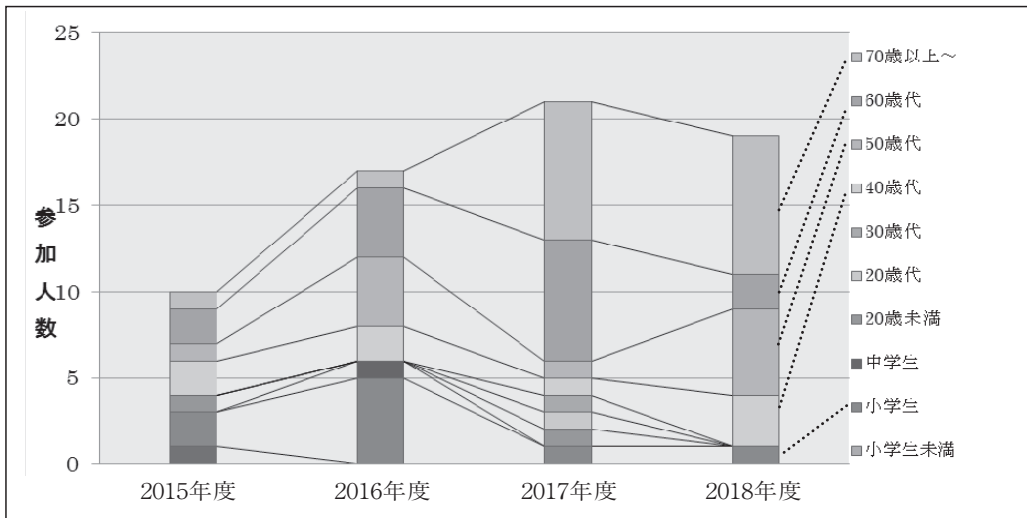
長門深川廃寺跡の見学（長門市西深川板持）

4 連携協力協定・連携事業の効果・成果

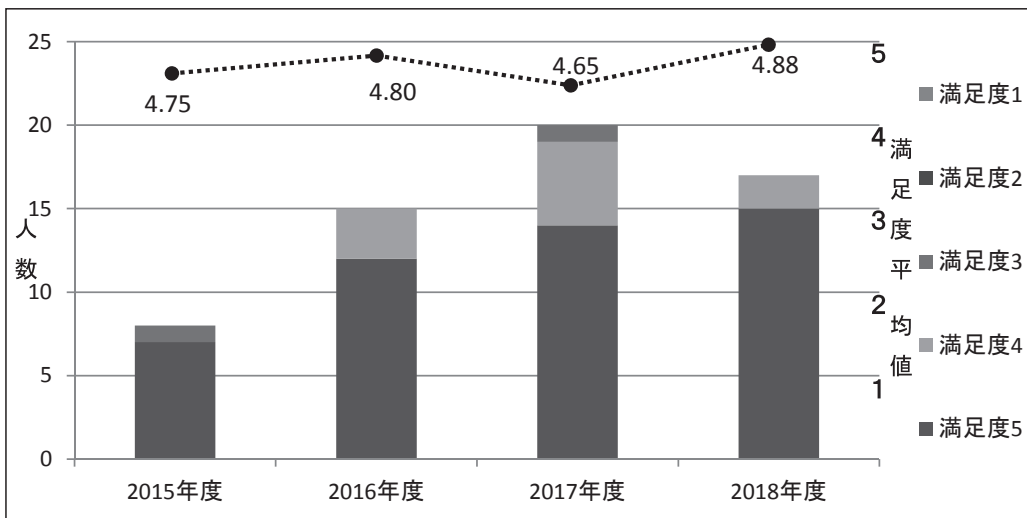
(1) 連携の機能的効果

博物館施設としての両館は、ともに広く山口県内の考古資料を収蔵しており、それらの資料を対象に調査研究を促進し、その成果を基に教育普及事業等を展開している点で強い共通性を有している。大きく異なっている点は現状の資料収集方法と頻度で、考古資料に関しては山口博物館が外部からの寄贈・寄託など限定的であるのに対し、埋蔵文化財資料館は大学構内遺跡調査による出土資料が増減こそあれ毎年相当量蓄積されていく。この要因が両館の主幹業務の相違として表われている。すなわち、山口博物館考古学部門が展示や学校地域連携教育支援事業を含め教育普及に力点を置くことになるのに対し、埋蔵文化財資料館は自らが実施した発掘調査の学術報告に力点を置くことになる。

この状況は何も否定的にのみ捉えるべきものではなく、山口博物館には地域連携や教育普及の運用方法が経験値として蓄積され、埋蔵文化財資料館には地域の考古学情報や研究成果が必然的に蓄積されることを意味している。両館による連携事業は、現在「地域の遺跡めぐりと出土資料見学」という形態を採用しているが、山口博物館の高い広報力と各自治体との繋がり、埋蔵文化財資料館の考古学的知見と調査能力という両館の特質が相互補完的に最大限に生かされており、その成果は参加者の増加と満足度に現れている。



年度別の参加人数グラフ



参加アンケートからの満足度グラフ (※満足度は5段階評価、数値が高いほど満足度が高い)

(2) 地域貢献としての成果

先述したとおり、講座の対象地は所轄自治体の埋蔵文化財担当者が少ない地域、換言すれば、地域住民が埋蔵文化財に直にふれ、学習する機会が少ない地域を中心に優先的に選定している。埋蔵文化財専門職員が十分に配置されておらず、博物館学芸員の配置率が低い当県においては、一部の市街域を除きほぼ全てが対象地になると言っても過言ではない。

講座を開催するにあたり、所轄自治体の文化財担当部署には共催として支援いただいているが、両館スタッフによる事前準備段階の熟覧資料選定やコース下見の際に、各施設が所蔵する未整理資料や学術的な公開が行われていない資料に対するレクチャーや、展示のアドバイス等も要望に応じ行っている。住民への直接的なサービスではないが、地域文化に対する下支えも当事業の大きな成果として挙げられる。さらに、講座修了後に対象地域住民から別途講演を依

頼られるなど、地域貢献事業の効果として広がりを見せつつある。

以上の成果および効果は、地域住民の文化的生活への影響としては小さなものであろうし、組織の内外面においても評価されづらい内容であるかもしれないが、博物館や大学として望むべき変化を社会に与える可能性を有している。長く継続させることにより、官学による社会教育・学校教育連携事業における好例の一つとなるのではないかと期待している。

5 総括と展望

当連携事業開始から本年度で4年目を迎える。両館の協定は5年で更新となることから、来年度で一区切りがつくことになる。

当連携事業は、初年度は資料展示と資料熟覧と遺跡めぐりを内容とする講座を開催し、次年度以降は後者を継続的に実施しており、来年度は宇部市東岐波^{ひがしきわ}を対象地として準備を進めている。年を追うごとに参加者も増加しており、地域貢献事業としても一定の成果を示しつつある。また、各地域の遺跡を実際に歩き、各地に所蔵される考古資料を実見することは、参加者のみならず我々自身が新たな知見を得る機会となっている。

今後の展望については、協定締結時に「連携事業にかかわる各種コストを削減しつつ、円滑な事業展開を進める」ことを約していることから、大規模事業への拡大はし難いものの、山口県の各地域にわずかではあるが考古学の学習機会を提供し、それぞれの地域の考古学的・文化的背景を学ぶこと、そして地下に眠る遺跡を未来へ護り伝えることの重要性を問いかけることは、自然に継続できるはずである。継続的な草の根活動は、急速に進行する情報化社会に埋もれがちであるが、諸資料の永遠なる保存継承を最大の責務とする博物館の本来像に合致するのではなかろうか。

また、当連携事業を持続可能にしていく視点として、次の3点をあげたい。

まず、地域住民のニーズを把握し、それに合致したものを提供できるかという視点である。参加者アンケートにも散見できるように、地域の歴史や文化財に直にふれる場や遺跡を歩いて体感することで、参加者の地域に対する興味や関心が喚起され、理解が深まったことは高評を得た。こうした地域の要望などに応じて、幅広い年代が参加できるよう移動行程の検討や移動手段の確保まで、より具体的にニーズを把握していくことで今後の事業に役立てていきたい。

次に今協定の第2条・3項にもあるように「他大学及び関連団体との連携協力」という視点である。具体的には、遺跡めぐり講座を実施する開催地の埋蔵文化財担当部署や地元教育委員会との共催や協力である。遺物熟覧のため、遺跡を所轄する機関との連携協力は欠かすことができない。また講座等の実施を契機に、両館と「他大学及び関連団体」との人的ネットワークの構築も今後期待できる。

最後に、連携事業が長期的な視野に立った地道で息の長い活動になりうるかという視点である。両館双方の強みを引き出すことも当然ながら、地域の社会教育環境に対して地域の特色ある埋蔵文化財の保存・活用を生かしながら、潜在的なニーズをも掘り起こして長期的視野に立った粘り強い取り組みを進めていきたい。

